

報告書

2023年3月17日

【件名】丸亀市

「社会と文化芸術活動をつなぐ ファシリテーター・コーディネーター養成講座」

【報告者】石川清隆 [表現とまなび実践研究ラボ (合同会社Foto-Musica)]

【講座実施一覧】

日程 [コマ]	日付	形式	テーマ	担当
1日目 [1]	1/14(土) 13:30-17:00	講義(1)	・文化芸術体験活動の強み ・まなびの場としてのワークショップ ・ミニワーク (自己紹介) ・コンセプトワーク など	ファシリテーター : 石川
2日目 [2]	1/21(土) 13:30-15:30	WS体験 (1)	・身体表現ワークショップ体験	ファシリテーター : 新井・板坂 コーディネーター : 石川
2日目 [3]	1/21(土) 15:30-18:00	振り返り (1)	・体験をもとにしたリフレクションと対話	ファシリテーター : 石川・新井・板坂
3日目 [4]	1/22(日) 13:30-16:30	WS紹介 (1)	・ミニワークショップの体験 ・ワークショップの紹介 (映像を用いて)	ファシリテーター : 新井・板坂 コーディネーター : 石川
4日目 [5]	2/11(土) 13:30-15:30	WS体験 (2)	・演劇ワークショップ体験 ・他者との関わり、コミュニケーション・グループワーク ・協働(コラボレーション)等	ファシリテーター : わたなべ コーディネーター : 石川
4日目 [6]	2/11(土) 15:30-18:00	振り返り (2)	・体験をもとにしたリフレクションと対話	ファシリテーター : 石川・わたなべ
5日目 [7]	2/12(日) 13:30-16:30	WS紹介 (2)	・演劇ワークショップの見学 ・見学後の振り返り	ファシリテーター : わたなべ コーディネーター : 石川
6日目 [8]	2/18(土) 13:30-15:30	講義(2)	・社会と芸術活動の結びつきの事例 ・社会包摂、障害者の芸術活動 ・コーディネーターについて 等	ファシリテーター : 吉野
6日目 [9]	2/18(土) 15:30-18:00	まとめ	・経験と学びを整理して共有する	ファシリテーター : 石川

【ファシリテーター・講師一覧(担当順)】

石川清隆 表現とまなび実践研究ラボ代表

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科(GA)特任助手

青山学院大学社会情報学部(ワークショップデザイナー育成プログラム)特別研究員

新井英夫 体奏家/ ダンスアーティスト

板坂記代子 身体表現者/ 美術家

わたなべ なおこ 演出家/ ワorkshopファシリテーター

劇団あなざわーくす主宰/ NPO法人PAVLIC理事

吉野さつき 愛知大学文学部教授/ワークショップコーディネーター

【講座の目的】

文化芸術からのアプローチにより社会課題を解決に導く地域の人材を育成し、新市民会館「みんなの劇場(仮称)」開館後の「リンクワーカー」(つながりをつくる人)として地域で活動することを目指す。

新市民会館「みんなの劇場」の基本理念に基づき、課題解決型事業、アウトリーチ事業に関わるアーティストを養成するとともに、市民活動団体やNPOなどが、「つながり」をキーワードとして、課題を取り巻く環境や状態に変化を生むファシリテーションスキルや新たな解決策に向けたコーディネートスキルを獲得する。

【対象参加者想定】

主に香川県内、四国内の文化芸術活動に携わるアーティストや社会課題解決に向けた活動に取り組む市民活動団体、NPO、ボランティアなど。

【講座全体のデザイン】

事前に委託者、受託者ともに打ち合わせを重ねる中で上記のような目的、対象の認識をすり合わせた。これをもとに、「体験とまなびの場としてのワークショップ(参加型体験活動)」に関わる事柄を中心に講座をプログラミングした。

知識を「覚える」ことだけでなく、覚えたこと、学んだことを、参加者自身や自身の仲間とともに活用できる、すなわち知識や経験を自身の能力として「使える」ようになっていくことを念頭に置き、ワークショップの体験とそれを起点にした振り返りを軸において構成した。

また、昨今多くの場で語られる「多様性」を、「それぞれバラバラでよい」ということではなく、それぞれバラバラな人が集まって、「どう塩梅よくやっていくか」という、個々の尊重と社会の持続可能性のバランスを、実体験を伴う試行、思考の場として提供し、他者との体験の共有のための対話の時間を設けた。

今年度の講座は、表現芸術を用いたワークショップの知識や技術の具体的な提供は一定程度に抑え、どのような対象に、どのような目的でワークショップを行うかと言ったコンテキスト(文脈)や、なぜそうした事業を公共劇場が行うかなどの背景も含め、公共劇場の役割を広く捉えてもらうことを考えた。

まずは、みんなの劇場(仮称)の目指す方向性における一つのキーワード、「社会包摂(Social inclusion)」に関して、体験を通じて知ってもらうこと、そして参加者同士のつながり、すなわち、緩やかな互恵的関係を持つ学習コミュニティを形作り始めることを念頭に置き、参加者同士が安心して対話できる空間、時間的デザインを行った。

1日目 [1]	1/14(土) 13:30-17:00	講義(1)	・文化芸術体験活動の強み ・まなびの場としてのワークショップ ・ミニワーク(自己紹介) ・コンセプトワーク など	ファシリテーター : 石川
------------	------------------------	-------	---	------------------

【参加者】 17名

【概要】

参加者のバックグラウンドが多様であったため、「劇場」と聞いてイメージしやすい鑑賞事業と対比し、今回の講座で主に扱う「参加型の体験活動（以下、ワークショップと呼称する）」プログラムについて説明し、用語や概念など一定の共通の認識を持ってもらうこととした。

また、表現芸術のワークショップを「学びの場」として捉えることができることも簡単に解説し、公共劇場が社会教育の役割を担えることも紐づけて伝えた。「学び」という言葉が、言葉を覚えたり、計算ができると言った狭義の学習を指すのではなく、対人関係や自己効力感につながる、非認知能力に関わることも含んだ広い意味での「学び」であることも付け加えた。

講義形式のみでは納得度が低いため、「体験してみる」時間として、自己紹介のワークを実施した。冒頭から「全員の前で自分のことを話す」という負荷を減らすためのデザインも行った。

最後に全員で円になって座り、全員が感想ないし印象に残ったことを一言ずつ述べてもらった。これはスタッフを含めたお互いがどのようなことに関心を持ち、どのような思いで講座に参加しているかを相互に知ることができる機会となり、受動的な態度で望むのではなく、主体的に、かつ、仲間（となりうる人たち）と一緒に参加している、という感覚を持ってもらう狙いもあった。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

◆やってみながら学ぶ→やり方は？

※第1回目の講座として、「概念はわかった、ではそのやり方は？」と、次のステップに興味を持ってもらえたことは良かったと思います。

◆ワークショップって集客じゃないの？

※ワークショップという言葉が様々な場所で、様々な意味合いで使われていることがよくわかり、第1回目以前として私（たち）が使う「ワークショップ」のニュアンスを伝えておくことは大切だと改めて感じました。

◆居場所感や貢献感を得るエクササイズに有用な素材として音楽やダンスを捉えることが出来たのは目からうろこでした。

※音楽家からの意見として非常に嬉しく感じました。演奏する、聴く、だけでなく「一緒にやる」ことで、別のベネフィットが生まれることを認識してもらい、かつ、そうした活動に関して意欲が生まれたのではないかと推察しました。

◆「みんなちがってみんないい」のその先へ。ワークショップはそのための一つのツール。

◆ファシリテーターとコーディネーターについて、大まかに知っていたけれど、さらにくわしく知ることが出来たのが嬉しかった。

2日目 [2]	1/21(土) 13:30-15:30	WS体験 (1)	・身体表現ワークショップ体験	ファシリテーター : 新井・板坂 コーディネーター : 石川
2日目 [3]	1/21(土) 15:30-18:00	振り返り (1)	・体験をもとにしたリフレクションと対話	ファシリテーター : 石川・新井・板坂

【参加者】 20名

【概要】

身体表現のワークショップを新井氏・板坂氏により実施。「ほぐす、つながる、つくる」というコンセプトで、「唯一の正解がない」事柄の捉え方、表現などについて体験した。

アタマでわかる、知るだけの「知識」ではなく、身体性を伴う学びの時間を提供し、今まで気づけなかったことなどにも注意を向けてもらった。また、ワークショップ後半はグループでの創作活動を行う時間も持った。

体験の後の振り返りでは「自らが体験したこと」を可視化、言語化し、それを他者と共有してもらった。同じことを体験しても「他者と異なる」受け止め方をする自分を、納得感を持って認識してもらい、「自分の当たり前」と「他者の当たり前」は異なる（あるいは近いこともある）ことを認識してもらった。「相手を知る」にあたって、自身を改めて知る、気づくというこの体験は、多様性、包摂型社会などを考える上での基礎となると考えている。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

◆あほらしいような事を面白く表現すると楽しくなる。

◆一緒に作業することの楽しさを感じた。これまでは分担してやるが多すぎた。

※大人になってからは一見「無意味だと感じること」「（すぐに）役立つと思えないこと」をあまりしなくなりますが、一緒にやってみると面白いことがあります。それは人によって異なりますが、場合によっては、軽い仲間意識が生まれることもあり、必要な作業を分担しただけでは得られない感覚でもあります。

◆失敗を恐れずに今日みたいに、ころんでも、つまづいてもいいんだよというみんなの心のマットに救われ勇気が出たので、ほくもそんな場が作りたいし、マットみたいな人間になりたいです。

※ワークショップの場が、安心、安全な場であるように努力するファシリテーターと、それに呼応するように参加者自身もそういう場を作ろうとする姿勢になったことが垣間見えました。さらに「別の場で場作りを行う立場になった時にも、そのような姿勢で望みたい」という参加者の意思が伺え、嬉しさと期待が重なります。

3日目 [4]	1/22(日) 13:30-16:30	WS紹介 (1)	・ミニワークショップの体験 ・ワークショップの紹介（映像を用いて）	ファシリテーター ：新井・板坂 コーディネーター ：石川
------------	------------------------	-------------	--------------------------------------	---------------------------------------

【参加者】 19名

【概要】

講座冒頭で1時間弱のミニワークショップの体験（見学も可）を行い、その後、新井氏、板坂氏が過去に行ったワークショップを映像にて紹介し、解説した。（[2]では主に体の動きを中心に、[4]では音をつかった表現を中心にワークショップが進行した。）

体験の後、障害者就労施設、小学校、高齢者施設、地域での高齢者の集まりなど、複数の現場でのワークショップの様子を紹介した。参加者の特性、ワークショップの目的、背景なども合わせて伝え、各回に合わせた、セミオーダーとも言えるワークショップのデザインについて伝えた。

最後に、参加者同士の共有の時間を設け、小人数グループで「今日体験したこと」「新たに知ったこと・気づいたこと」「自分の活動との結びつき」などについて対話してもらった。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

- ◆子どもたちが興味を持ちやすい、動きや音、わかりやすいワークの進め方など、たくさんたくさんエッセンスをいただいた。
- ◆うまい表現でなくていい。その人ができる事を表現→認め合う
- ◆いわゆる先生がいてお手本通りに何かを行うということではなく、個性に沿った様々な動き方、表現方法はどれも正解であること。輪になって周囲と笑顔が生まれる空間作りとなる気づきが得られました。
- ◆（自分の活動に活かせそうな事→）「教える」ではなく「導く」

※今回は体験に加え「見学」ということで、一歩引いたところからワークショップを映像で見たり、解説を聞いたりすることで、ワークショップ中の「ファシリテーターの手法や技術」だけでなく、どのような場を作ろうとしているのか、なぜそうしようとしているかなど「表面に現れにくいエッセンスの部分」も受け取ってもらえたかと思えます。

4日目 [5]	2/11(土) 13:30-15:30	WS体験 (2)	・演劇ワークショップ体験 ・他者との関わり、コミュニケーション・グループワーク・協働(コラボレーション)等	ファシリテーター :わたなべ コーディネーター :石川
4日目 [6]	2/11(土) 15:30-18:00	振り返り (2)	・体験をもとにしたリフレクションと対話	ファシリテーター :石川・わたなべ

【参加者】 23名

【概要】

テーマを「コミュニケーション」と設定し、わたなべ氏に演劇の手法を用いてワークショップを実施してもらい、参加者に体験してもらった。ウォームアップとしてのゲーム的要素の多いワークから始まり、徐々に「カードに書かれた文言を話す」「ストーリーを考える」など、演劇的要素が追加されていった。

あくまで「上手に演技を行う」ことが目的でなく、「私でない他の人ならどういうふうに話すだろうか、どう考えて行動するだろうか」と、「他者の立場で考える」体験や、グループでアイデアを出しながらひとつの小さな作品を作るためのアウトプット作業において「合意形成を行う」体験など、コミュニケーションに関わるタスクを経験した。

その後の振り返りでは、前回同様、ワークショップ内で体験したことをメタ認知的に可視化、言語化し、他者と共有するプロセスを経験した。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

◆最終的なねらいに向けて、どうステップを考えるか共通理解できてよかった。

◆スモールステップのプログラムやほぐし方、近づき方はとても見習いたいと思う。

※体験と、その後の振り返りを経て、スモールステップを重ねていくというワークショップのデザインについて感覚を掴んでいただけたと思います。（学習論ではscaffolding(スキャフォールディング / はしごかけ、足場かけ)などという言葉で説明することもあります。）

◆“参加している人にフィットするように” 決めた通りにするのではなく、その場に応じて変えていくことも必要。（そのためにあらかじめいろいろ考えておかなければ）

※デザインした事をそのまま進めるのではなく、現場のフィット感に応じて調整する、あるいはゴールそのものも変更する場合があります。熟達したファシリテーターは経験や推測の幅を広げて、多くのことを事前に想定したり、現場で対応したりすることで、ワークショップの参加者へのフィット感を高めることが可能になると考えています。

◆フィードバックの言葉がけや「やれそう」「やりたい」につながる言葉がけを大切にしたいと感じた

※参加者が何らかの行動をした際や、発表のフィードバックの際、ファシリテーターや他の参加者からの言葉がけ、態度は非常に重要だと思います。単に「すごかったね」のような一律的な声かけでなく、そのファシリテーター自身が受け取ったことをもとに、場合や相手によって「こう見えたよ」という、言わば鏡のような役割を果たしたり、「ここところをもうちょっと見てみたかったな」といったような、ブラッシュアップに向けての言葉がけをしたりすることもあります。「やれそう」「やりたい」、あるいは「それならこうしてみたらどうだろう」のように、参加者がさらに参加度、参加意欲を増すきっかけにもなる大事な部分で、ここに気づいてもらったのも良かったと思います。

5日目 [7]	2/12(日) 13:30-16:30	WS紹介 (2)	・演劇ワークショップの見学 ・見学後の振り返り	ファシリテーター ：わたなべ コーディネーター ：石川
------------	------------------------	-------------	----------------------------	--------------------------------------

【参加者】 17名

【概要】

市内の保育関係者に参加して頂き、[5]と同様のプログラムの流れでわたなべ氏によるワークショップを実施した。講座参加者はそのワークショップを観察者として90分間見学し、ファシリテーターの様子、発言、ふるまい、及び参加者の様子、変化などを可能な限り丁寧に観察してもらった。

ワークショップ後の時間で、参加者は小グループに分かれ、見学後の振り返りを行い、自身が見取ったこと、推測したことを中心に対話し、他者との見取りの違いを含め、気づきや学びを共有した。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

◆ファシリテーターの役割は周り全体を見守り、声かけ、言葉かけのタイミングが必要だと思ったのと同時にむずかしいと思った。

※難しいと思ってくれたのは良かったです。「慣れていない」→「慣れてきた」の次には「慣れた（慣れすぎた）」という、思考停止（あるいはその一歩手前の）状態になっていしまうことがあります。これは「こうしておけばいいんでしょ」という、学びや創造を放棄してしまう状態になりかねません。ファシリテーターがそのような姿勢の場合、参加者にもその影響が出てしまうこともあり、「本当にこれで良いのか」と、常に問う姿勢は、自分自身も特に大事にしたいことだと考えています。

◆「あぶれてくれてありがとうございます」「身を引いてくれてありがとうございます」先生！良かったです！

※ワーク中の一コマですが、普段であれば「望ましくないこと」として、誰もあまり引き受けたくない役割を担ってくれたことに対して、「ありがとうございます」という言葉がけを行っていました。それにより、「そうしたことを引き受けてくれることで回っていることもある」と、社会の一部、特に見づらいところにスポットを当て、こうした事を考える時間を作ってくれたと思います。そうしたことについて、この参加者は「良かったです！」と述べてくれました。

◆段階を踏んで、ほぐし、ひらいて、あたためながら、ばらばらだった個々がつながっていったところで、（もうできそう！、やってみようかな！！）とGoalを示すと安心感！

6日目 [8]	2/18(土) 13:30-15:30	講義(2)	・社会と芸術活動の結びつきの事例 ・社会包摂、障害者の芸術活動 ・コーディネーターについて 等	ファシリテーター：吉野
6日目 [9]	2/18(土) 15:30-18:00	まとめ	・経験と学びを整理して共有する	ファシリテーター ：石川

【参加者】 17名

【概要】

はじめに、[1]から[7]まで行ってきた講座の概要（主にワークショップという枠の中の話をしてきたこと）を伝え、その後、吉野氏に「社会と芸術活動の結びつきの事例」や「社会包摂、障害者の芸術活動」などについて、前回までよりも範囲を広げ、街との関わりなども含めながらレクチャーを行ってもらった。

まとめでは、講座で得た経験などを小グループで共有し、その後全体で円になり、講座に関して、あるいは印象的だった事などについて全員が一言ずつ述べてもらう形で共有し、6日間の講座を終了した。

【アンケート、気づいたことシートからの参加者の反応（※：石川所感・補足など）】

- ◆コーディネーターはワークショップの中だけではなく、新しい事業を行ったりするときの他の人との関わり方の中でも生かすことができる。
- ◆最初からうまくできなくてもいい。というか、ムリ。なので練習を重ねていくことが大事（ふり返りも含めて）だと思った。
- ◆講座全般を通して、奥の深さを感じ大切なことに気づきながらも、自分にできるのかな・・と不安になることもあった。けれど、だんだん、今できることから始めたらいいのだと思えた。何より一人では難しいのだから、皆の力でなんとかすればいいと思うとちょっと安心できた。
- ◆コーディネーターの役割の大きさとモチベーションの高さと楽しみが具体的にわかったように思います。
- ◆6回受講させていただきありがとうございました。普通の一般的なセミナーと違い、自分が変わる講座に参加できとても勉強になりました。

【延べ参加者数】 113名

【講座全体の所感】

まず、参加者の意欲、参加度合いが高いことに驚きと嬉しさがありました。そのことは毎回のアンケートや、振り返りと学びを整理するための「気づいたことシート」への記載の多さ、そして、通り一辺倒の事ではなく「自分の言葉」として書かれていたことから伺えました。

さらに、その参加者以上の熱心さをもって講座準備や、身体に不調のあるファシリテーターへのケア、そして（体験しないとわかりづらいという特性をもつワークショップに）時には一緒に参加して、身をもって理解しようと努めてくださった丸亀市職員の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

この講座は「知識を得る」あるいは何かの「資格を取る」ためのものではなく、正解がないことについて、「何を善しとするのか」といった根本的なこと、「自分と異なる他者との関わり」、そのエクササイズとしてのワークショップという場を作るにあたって考える必要があるだろう事を、レクチャー、体験、振り返りを複数回繰り返して学ぶ場としました。

一般的には「この時間この講座に出席すれば〇〇という成果、資格が得られる」として講座が開催されがちですが、必ずしもそうした「効率」を求めないこの講座に、繰り返し参加してくれた方々がいらしたのはとてもありがたいことでした。

講座の目的である、『「みんなの劇場（仮称）」開館後の「リンクワーカー」(つながりをつくる人)として地域で活動することを目指す』、『ファシリテーションスキルや新たな解決策に向けたコーディネートスキルを獲得する』にかんしては、全てを達成することはありませんでしたが、その入口となる「協働体験」や「正解のない事を学ぶ場」としてのワークショップについて学ぶとともに、その場をつくるコーディネーター、ファシリテーターの役割や考え方の基礎を、体験しながら学んでいただけたと思います。

【今後について】

上にも記しましたように、文化芸術のワークショップについて、ファシリテーター・コーディネーターの役割についての概要と入口となる部分についてはお伝えできたかと思っており、今後、もし次の段階となる講座を行うようであれば、ファシリテーション・コーディネートについて、実践的に学ぶ段階に入っていくこともあり得るかと思えます。

その場合には、参加者同士で小さなワークショップなどを作って、お互いに参加者となって試してみるという講座の組み立てがまずひとつ考えられます。

或いは、学校での実践現場が既にあるとしたら、他の実践者やファシリテーターとともに、事前準備を行ったり、当日現場へも同行してもらい、文字記録や映像などを用いて事後の振り返りを一緒に行ってもらうなどの方法が適している場合もあるかもしれません。

そうなった際にもし必要でしたら、また一緒に考えていくことができましたら幸甚です。

以上

